

46億年の歴史をもつ地球で、生物がいつどのように出現したのかは、謎に包まれたままだ。日本の研究グループは2017年、約40億年前にできたカナダの地層で最古の生物の痕跡を発見した。これまで最も古かった38億年前をさらに2億年さかのぼるという。謎の解明を目指し、初期の生物を追い求める研究が、世界で熱を帯びてきた。

岩石を割ると黒い点が見つかった。グラファイトと呼ぶ小さな炭素の塊だ。大きさは数々（数百倍）（約100万分の1）。専門家でないとただの模様か汚れにしか見えない。しかし東京大学の小宮剛教授は大発見だと確信した。「この地層で当時、生物が住んでいた証拠だ」。まだ断定はできないが、太古の海洋に生きていた原始的な細菌「メタン生成菌」の可能性がある。

ドル半島だ。小宮准教授は同じく3年間、雪が無くなる夏に現地の人を警護役に雇う、命懸けの調査だった。生物だったと分かる化石は、約35億年前以降にできた地層に限られる。それ以前の生物については、今回のグラフィットのような痕跡を詳しく述べる。

これは最も古いといわれた生物の痕跡もグラファイトだ。東北大学とデンマークのコペンハーゲン大学の共同研究では、約35億年前の地層からメタン生成菌が生きていたとみられる痕跡を見つけた。岩石中に残された気泡に少量のメタンが残っていた。メタンの中の炭素の同位体の比率を調べると、生物の活動の結果と分かった。カナダで見つけたケルなどの金属もたくさん溶けていたとみられる。

溶けていた金属を触媒に有機物が合成され、やがてアミノ酸や核酸などの生物の構成に欠かせない材料が作られたというが、生命誕生の有力なシナリオだ。多くの研究者はメタン生成菌が、誕生の瞬間に最も近い生物に違いないと信じている。

その一端を、東工大と海洋研究開発機構などのグループが協力して証明した。インド洋の深海の、熱水が噴出する場所で生きるメタン生成菌を採取、原始の海洋の状態を再

く調べるしかない。元素には性質は同じでも重さが少しう違う「同位体」がある。炭素の場合、ほとんどが炭素¹²だが、重い炭素¹³もわずかにある。生物は周辺

と炭素¹³の比率にずれが生じる。この違いを精密に分析する方法に詳しい佐野有司（東大教授）らと協力し、カナダで見つけたグラファイトは生命的痕跡だと判断した。

ラファイトも、炭素同位体の数値から生物だったことは間違いないだろう。

46億年前に誕生したばかりの地球上には、微小な惑星が次々に衝突していた。大気には現グループが13年、グリーンランドで見つけた。37億～38億年前と推測されている。自信を抱けるもう一つの理由がある。こうしたグラファイトがメタン生成菌の痕跡と

現して育てた。外部からエネルギーを得る反応ができる、窒

素を含むたんぱく質やDNAを作つて子孫を残せるのか。

実験の結果、メタン生成菌に

窒素を取り込む反応は可能だ

と分かり、その後の生物の進化に向け、重要な役割を果たしたとみられる。

ただ、カナダのサグレック

岩体は、かつて热水を噴出

るような場所ではなかった。

热水のない場所でもメタン生

成菌が生きていくほど、生

物の進化が進んでいた可能性もある。小宮准教授は「もつと早く生命は誕生していたのかも知れない」と推測する。

最も古い生物の探索は世界で

活発だ。英国のグループは17

年、カナダの別の地層で約42

億年前の生物の痕跡を見つけたと発表した。年代の測定法などに異論があり、まだ正式に認められていない。

小宮准教授は同じ地層で調査を始める計画だ。新たな痕跡を見つけて、さらに時代をさかのぼれないかと期待を寄せる。太古の地球の姿と、生命誕生の謎を探る挑戦は、まだ続く。（福井健人）

生命誕生の時期探れ

正体、メタン生成菌に近く



メタン生成菌

酸素なくても生きる

二酸化炭素を取り込んでメタンを作りエネルギー源とする原始的な細菌だ。生物学的には「古細菌」の仲間に分類される。今も深海底で熱水が噴出している過酷な環境から水田や湖など私たちの身近な水域まで広く生息している。酸素がない状態でも生活でき、排水や汚泥の処理などにも使われる。

地球の海は40億年前、酸素が乏しく二酸化炭素や水素が豊富だったと考えられている。メタン生成菌の生育には適していた。生命誕生に最も近い生物として注目され始め、メタン以外の有機物を合成する反応を再現する実験も多い。その生成物をもとに藻類や酵母など新たな生物が出現し、進化の推進役になったとみられる。